

日本が敗戦を迎えた一九四五年八月一四日朝日新聞を辞めた、むのたけじはジャーナリズムは戦争を止められるかを問い、ローカル新聞社を経営、九六歳の今もメディアの戦争責任を追及しつづける。

新聞の戦争責任を問うゝむのたけじ

ジャーナリスト 西村 秀樹

《支配と被支配の仕組み》

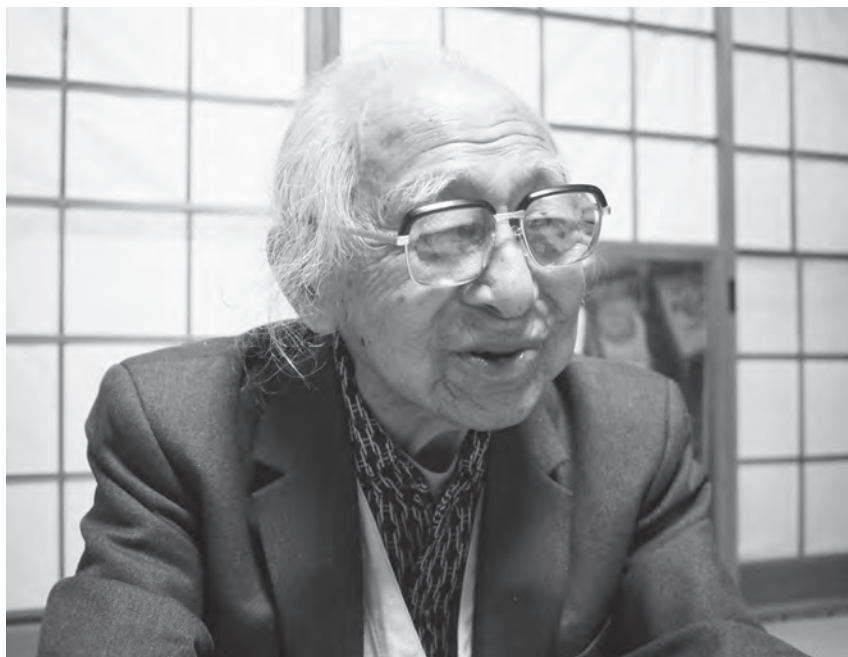
「なぜ戦争は止まないのか」。そんな問題の立て方に強く興味を引かれ、むのたけじに話を聞きたいと電話をかけた。ら来てよよいとの返事で、秋田・横手市の自宅訪問を決めた。むのたけじ（本名・武野武治）は、誕生日が一月二日なので今年の正月で九六歳。まだ現役ばりばりのジャーナリストである。私は大阪から秋田空港まで飛び、JR奥羽本線で秋田から横手までローカル線で一時間余り。むのたけじは戦後ずっと暮らした住まいはかつての市営住宅を改造した木造建ての小ぶりなもの。玄關脇、寒さよけの二重扉の横、

柱にたいまつ新聞社という木製の看板がひっそりと、しかし存在感あふれてかかっていた。ああここがあのだ。たいまつ新聞」の社屋だとひとりごちた。

座敷に通され初対面にもかかわらず旧知の友人のように親密な笑顔で迎え入れられた。むのの声は大きく高齢を感じさせず、いたって元気な様子。私が横手を訪問する直前、むのは一人で講演のため北海道を訪れたばかり。沖繩にも毎年のように一人で訪問し琉球新報など沖繩の若い記者との討論を楽しみにしている。こんな話から会話は始まった。むのたけじの生涯を本人の言葉から引用する。「私は一

むのたけじは「希望は絶望のどん底に実在する」と語る

(横手市の自宅で筆者写す。2010年9月24日)



九一五年に農村の無産階級の家に生まれた。両親がまじめに働き、それでも食うに手一杯なのに、ろくに働かず楽に暮らす有産者が同じ地域にいるのを見て、子どもの頭をかじげた。まわりの大人たちは「それが世の中さ」という顔つきだったから近寄りたくなかった。三つの学校へ合計十五年も通ったが、社会の支配と被支配の仕組みを学ばせる授業は一時もなかつた。東京に出て神田神保町で禁断の書物たちと出会い、むさぼり読んだ。目はますます開け、胸はますます熱くなり、青年期のしょっぱなにレーニンに恋し、毛沢東に恋した。九十歳を過ぎた今も毛沢東を愛し、レーニンに心を引かれている」(『戦争絶滅へ、人間復活へ』岩波新書)

支配と被支配の仕組みがキーワード。実はこの文章にレーニンと毛沢東への批判が続くが、それは後述する。

《外交官志望から新聞記者へ》

むのたけじは一九一五(大正四)年生まれ。国内では大正デモクラシーが進む一方、対外的には日清・日露戦争に勝ち、韓国併合を経て大日本帝国が東アジアへの侵略をすすめる時期に当たる。学生時代の様子を尋ねた。むのたけじは外務省海外公館での書記官勤務を目ざし東京外国語学校のスペイン語学科に入学。下宿先の東大崎から都心にある外語まで毎

日片道二時間歩いて通った。当時、外語は麴町区竹平町（現在の千代田区一ツ橋）にあり、学内ストライキで学生たちが歌う「インターナショナル」が皇居に聞こえたとの理不尽な理由で警察官が六〇〇人かけつけ学生運動を厳しく弾圧した。これが戦前の学生運動の最後であったという。

むのは外語の弁論部を再建、大阪・中之島の中央公会堂に出かけ全国各地からの大学の弁論大会に参加したり、部落解放運動の勉強会に出席したりした。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で知られる水平社宣言の起草者・西光万吉と勉強会后、終電に遅れ雑魚寝するなど部落解放運動に関心を寄せたのもこの時期だ。むのが一番尊敬する人物は、田中正造と松本治一郎の二人。田中は足尾銅山鉍毒への反対運動のリーダー、松本は全国水平社の中央委員会議長などをつとめた部落解放運動のリーダーである。

一九三六年、むのが二一歳のとき外語を卒業、外交官には年齢制限のためなれず、新聞記者になりたくてサンデー毎日と報知新聞を受験し両方合格した。が、サンデー毎日は大学の指導教官の紹介があったので束縛をきらい、給料は毎日より安かったものの報知新聞を選んだ（ちなみにこの年サンデー毎日に入社したのが後の芥川賞作家・井上靖である。報知新聞は大正期から昭和初期、発行部数第一位の大衆紙で、一九四二年読売新聞に吸収された）。報知新

聞に四年間勤めてから、朝日新聞に籍を移した。

《従軍記者》

一九四一年一二月、日本は米英に宣戦を布告、アジア・太平洋戦争が拡大。新聞も皇軍の侵略とともにアジア各地に拠点を進めた。朝日新聞はむのをインドネシアへ派遣した。そこでむのが見たのは「本当の戦争」の姿であった。「戦場へ行けばわかりますが、行つてしまえばもう『狂い』ですよ。相手を先に殺さなければこちらが殺される、という恐怖感」。インドネシアのジャカルタに帝国陸軍は「慰安所」を設置。そこで皇軍兵士たちは本来見られてはならない姿を現地のインドネシア民衆に見られた。

「慰安所ではどういう風景が見られたか。日本の兵隊がやってきて、まず女に金を渡すんです。そして、もう順番ですよ。何千人もが長い行列を作つて順番を待っている。女の前に行つてからズボンを脱ぐ時間がないので、順番を待ちながらマラをピンピン立てて、それを手に握つて『早くやれ！ まだか！』と叫んでいる。本当にあわれなものだ。

それを地元のインドネシアの人たちに、全部見られるわけですよ。慰安所を設けてから、『日本人つて馬鹿なやつらだな、たいしたことないな』というインドネシア人の反

応が強まった、私なんかは思った」

かつて筆者はいわゆる朝鮮人従軍慰安婦（日本軍性奴隷）として初めて韓国国内で名乗り出た金学順（ハッキョヌン）に日本人ジャーナリストとしての初のインタビューをし、やがて「旧日本軍の関与」を認める官房長官談話に至るスクープをとったことがある。慰安婦をめぐる右翼から「慰安婦は公娼だ」との攻撃は続いたが、むのの目撃談を踏まえると、大東亜共栄圏構築のためとの大東亜戦争というが実は単なる大義名分にすぎず、慰安所の前でマラをビンビンし行列する皇軍兵士のあわれな姿こそが「本当の戦争」の姿ではなかったのか。むのは戦争の本当の姿を実感した。

《敗戦前夜》

一九四五年八月、むのは三〇歳。記者生活一〇年目を迎えた。大日本帝国の敗色は濃く、八月六日、広島にアメリカ軍は原爆を落とした。朝日新聞東京本社には広島被害が甚大「らしい」と伝わり、翌七日には「らしさ」が具体的に人口三五万人がほぼ壊滅的との概要がおぼろげながら判明した。取材班を出すことが決まり、むのに白羽の矢が立った。

カメラマン、科学部員とともに社会部からむのが選ばれ、陸軍との間で交渉がまとまり、東京の郊外、所沢飛行

場に待機した。八月八日早朝には準備が完了。しかし制空権はすでにアメリカ軍に移り、日がとつぶり暮れてからようやく飛び立った。広島飛行場は使用不能で、いったん無灯火飛行を続けたものの、パイロットが「岩国（山口県）ではなく米子（鳥取県）に向かう」と宣言。カメラマンは了承したが、むのが米子ではだめだと反対、結局、夜明けに立川飛行場に戻ってきた。もし原爆投下直後の広島に取材に入っていたら、むのは別の人生を歩んだことであろう。

ここぞでなぞなぞです。日本が負けたのはいつでしょう。答は三択。一つ目は九月二日説。二つ目は八月十五日説。三つ目が八月一日説。さて肝心の答だが、実はどれも正解。ちょっとだけ種明かしをすると、九月二日説の根拠は、東京湾に停泊しているアメリカ海軍の戦艦ミズーリ号艦上で、日本政府の全権・重光葵と大本営を代表して梅津美治郎（ウメヅ）参謀総長が降伏文書に署名をした日。アメリカや中国では対日（中国では抗日）戦争勝利記念日を祝う。

八月一日説の根拠は、昭和天皇が御前会議（最高戦争指導会議）の席上、和戦両派の意見が拮抗する中、最後に昭和天皇の「聖断」によりポツダム宣言受諾を決定、その旨スイスやスウェーデンの中立国大使館を通して連合国に通告した日。作家の小田実は一九四五年八月一日、大阪でアメリカ軍の空襲による炎の下、命からがら生き延びた

経験を踏まえ、生前毎年この日に不戦を誓う集会を大阪で開催していた。では八月一五日はどうかと言えば、前日決定した「終戦の詔書」を深夜、皇居の防空壕の中で昭和天皇がレコード盤に録音し、そのレコード盤をNHKが再生・放送した日だ。韓国や北朝鮮では光復節（光が甦った日）として民族の解放を祝う。仏教の盂蘭盆会で祖先供養の宗教的な儀式の日でもある。

《朝日新聞を退社》

さて話を元に戻すと、朝日新聞東京本社に大日本帝国敗戦の方針が伝わってきたのは、八月一二日のこと。八月六日、アメリカ軍が広島に「新型爆弾」（原爆）を落とし壊滅的な被害を与えたのを受け、八月九日第一回目の御前会議が開かれた。会議が開かれている最中に、ソ連軍が日本に対し宣戦布告し満蒙国境を突破してきたことや、昼になって二発目の新型爆弾をアメリカが長崎に落とすことが伝わり、いよいよ戦争継続がむづかしくなった。昭和天皇が一回目の「聖断」を下した。しかしポツダム宣言受諾に天皇制存続の条件をつけたため、連合国側に再度確認をもとめた。その結果、和戦両派の対立が続いた。この段階で、朝日新聞で陸軍、海軍を取材していた記者がポツダム宣言受諾の方針を知った。

八月一二日夜から一四日夜まで、三日間、有楽町にあった朝日新聞東京本社で記者の集まりが各部単位で開かれた。「いずれ連合軍が来るが、そのとき朝日はどうあればいいか考えてくれ」と会社側は問うた。論議の的は占領下で新聞はどうすべきか。会社側は何の方針も示さなかった。というよりは示すことができなかった。何せ、日本が近代になって初めて経験する敗北なのだから。むのの考えはこうであった。「突然、そんなことを言われても、社員が本音を言えるわけではないでしょう。むしろ、それまで新聞は負けた戦争を勝った、勝ったとうそばかり言い続けてきたのだから、こらできちんとけじめをつけるべきだ」と。むのは「われわれは間違ったことをしてきたのだから、全員が辞めるべきではないか」と提案した。しかしこれに賛成も反対もせず、重い沈黙が会場を覆ったという。

一人の学芸部員が「いや、むの君の言う通りだと思っけれども、私には女房も子どももいるから、失業するわけにはいかない。君は私を馬鹿にするだろうが」と話しかけてきた。むのは「とんでもない。あなたは失業者になるわけにはいかないから、とにかく朝日でこのまま働く。それは恥をしのいで、新しく生きようとする気持ちを表したわけだから、それはそれでいいじゃないの」と答えた。結局、むのと一緒に辞めるといった人は一人も出てこなかった。

八月一四日の夜、むのは「私はもう朝日を去ります。明日から来ません」と宣言、一五日から出社しなかった。

《朝日「国民とともに立たん」》

敗戦から二か月後の一九四五年一〇月、読売新聞では正力松太郎社長ら経営者の戦争責任を追究する読売争議が勃発、従業員組合長の鈴木東民が編集局長になり生産管理をし「民衆の友となり、人民の機関紙たらん」と宣言し新聞を発行した。しかし占領軍がレッドページを実施、やがて編集権は経営者の側に戻る（鎌田慧『反骨く鈴木東民の生涯』）。

読売争議の翌月七日、朝日新聞は「国民とともに立たん」との宣言文を掲載した。村山社長以下全重役、編集総長、編集局長、編集主幹の辞任を発表し、つぎのように述べた。「開戦より戦時中を通じ、幾多の制約があつたとはいへ、真実の報道、厳正なる批判の重責を十分に果たしえず、またこの制約打破に微力、ついに敗戦にいたり、国民をして事態の進展に無知なるまゝ、今日の窮境に陥らしめた罪を天下に謝せんがためである」。朝日新聞記者の坂本龍彦は、『朝日新聞社史ノート』のサブタイトルをもつ『言論の死まで』（岩波書店）で、「太平洋戦争で戦死、戦病死した『朝日人』は五六人に達した」と記す。その一方で発行部数は、急速

に伸びた（一九四二年に三七〇万部のピークを記録）。戦時中、政府は新聞統合令により一県一紙に統合し、新聞間の競争が薄らいだ。例えば大分合同新聞といった社名にその残滓が見えるなど、地方県紙の多くが戦時中の合同県紙の流れをいまでも受け継いでいる。

《たいまつ新聞創刊》

戦後、むのは名古屋の地方新聞で編集の仕事を手伝った。なぜ名古屋かというと、上海に日本が設立した高等教育機関の東亜同文書院大学が愛知大学に引き継がれるなど名古屋が中国研究の拠点になると耳にし、毛沢東に恋する身の上としては名古屋でぜひ新聞の仕事をしたいと願ったという。しかし、名古屋での新聞経営は厳しく、むのは故郷の秋田県横手市に帰る。

敗戦から三年、むのは横手で「週刊新聞たいまつ」を創刊する。一九四八年二月二日号の創刊号には、旧制横手中学時代の恩師で、作家石坂洋次郎が「東北の人々へ」と題した原稿を寄せている。むのは石坂に旧制横手中学の三年生から五年生にかけて国語と作文を教わった。「前から成績の悪い順に着席していた当時の教室で、授業中教師と目を合わせないようにうつむいていた前列の者たちが、石坂の授業においては『あててくれ』といわんばかりに顔を上

げるようになり、教室の風通しがよくなったと感じていた。教室で人を解放させるようなあたたかなムードを持ち、空気のように包まれる感じであった」と回想している（読売新聞秋田版）。

前年（一九四七年）は主権在民、戦争放棄と人権尊重を定めた日本国憲法が施行され、石坂が旧制女学校を舞台にした青春小説『青い山脈』を朝日新聞に戦後初の連載小説として掲載した年。暮らし向きはしんどくても、新しい日本の建設に向け、人々は希望をもっていた時代である。

とはいえ「週刊新聞たいまつ」が、故郷の人たちに万々歳で受け入れられたわけではけっしてない。戸別訪問をして一軒一軒、新聞を配り購読をせよという作業を続けた。多くの善意でむのが創刊した「たいまつ」は明かりを増していったが、そうとばかり言ってもらえない経験もしたという。むのはこんなエピソードを書いている

「創刊直後、読者獲得のキャッチフレーズを手製のポスターに書き込んで、街路の電柱に貼り出した。『新時代の羅針盤・たいまつ』など平凡な文句であったが、中に『ボスの敵・たいまつ』というのがあった。それを貼り出して十日とたたぬまに、私はある席上で一人の中年男にからまれた。『きみはなんだっておれをカタキよばわりするのか、ボスの敵だなどと出しやばつたことをすると、ろくなことは

ないぞ』といわれ、あつけにとられた。私がすぐに思い出したことは、魯迅がああ『阿Q正伝』を発表したとき、作品とは無縁な勢力家たちが魯迅はおれをモデルにしたと勝手に怒りさわいだ、と伝えられている一事であった。思わず、私はニヤリとした。この笑いが一層怒らせたらしい。『第一ひとをよぶのに、ボスとは何だ。バカにするな、わざわざ表通りに貼り紙までして』『でもボスというのは英語で確か親分とか統領とか、とにかく人の上に立つ人のことですよ。お宅に帰つたら、お子さんに英語の字引をひかせてみなさい、きつとそう書いてますよ』『そうだつてげえ』（『たいまつ十六年』あとがき、岩波現代文庫）

「思うに、敵意や憎悪を頭から敵視することはできない。それは善意と共に、やはり進歩への一拍車であろう。それだけに、もしも真の敵を見誤つたり、憎みすぎたり、憎まなすぎたりするならば、害毒は計り知れないものがある」
むのはこう総括するが、敵と闘ってきた経験がそう語るせるのであろう。

小さな町でいきなり創刊されたばかりの新聞を購読する人は大しておらず、赤字続き。創刊から一年後、ついにはむのは自殺騒ぎを起こす。取材、執筆、印刷と寝る間も惜しんで働き、精神的にも肉体的にも追いつめられた。腑抜けのように線路脇をふらふらと歩き列車が来たら飛び込も

うとしたが、機関車のシュシュという蒸気を吹き出す余りに大きな音にびっくりし、ふと我に返り、自殺を断念した。

《「たいまつ十六年」》

たいまつ読者について、同じ東北出身の評論家・佐高信がこんなエピソードを紹介している。

「むのがはじめて郷里で新聞を作り、戸別訪問して売り歩いている時、入っていった農家では、五十すぎらしい父親と、二十五歳前後の息子がドブロクを飲んでいた。

当然、むのは若者の方に新聞を差し出したが、彼は一面上に目をとめ、『なに？農村景気は下り坂だつて？えんぎでもねえや』と言って、つつけんどんに返してよこした。しかし、その父親の方が『なに、百姓が苦しくなるつて？んだ、んだ、その通りだ、どれ、おれに見せる』と手を出してよこし、しばらく新聞に目をこらしながら、代金三円を払った。

『若い目が老いた目より、ヨリ確実に強い視力をもっているとは限らなかつた。親と子との反応のちがいは、昭和初期の農業恐慌の体験を持ったか持たなかつたのちがいであつたらう』と、むのは述懐している。

こうした読者がむのと「たいまつ」を育てた。はじめのうちは新聞に広告を掲載しない方針であつたが、広告も読

者にとつては必要な情報だとむのは考え、広告主選びを広告業者に任せるのではなく必ず自分の目でその会社を訪れ業績や営業方針を直接聞き吟味した上で掲載するかどうかを決定した。こうして広告を掲載するようになって、新聞発行の経営も安定していった。また、奥羽本線横手駅で「週刊新聞たいまつ」を駅売りすると、たまたまの横手駅での入手がきっかけであつても、内容がおもしろいからと日本各地の思わぬところから郵便による定期購読者が増えていった。

「ジャーナリズムとは何か。いいことは増やす。悪いことは二度と起こさないようにする。ただ。それだけです」ここに、むのの考えが過不足なくまとまつている。そしてそんな記事があふれる「週刊新聞たいまつ」に読者がついたのでと思う。

一九六四年、むのは「たいまつ」の発行を停止する。その期間をむのは「朝鮮戦争勃発の二年前から東京オリピック開催の一年前まで」と総括する。経済白書が「戦後は終わった」と宣言し、日本が高度成長経済をひた走る時代とも重なる。新聞発行を停止後、記事を集めた書籍『たいまつ十六年』が理論社から出版されたが、発売三か月で五千部を数えた。「たいまつ」の読者がいかにむのの文章を待っていたかの証左である。

《新聞は戦争を止められるか》

むのは戦争を忘れない。二〇〇五年、むのは沖繩を訪れ、琉球新報社が終戦六〇年を記念して発行した『沖繩戦新聞』を見て、一九四五年八月自分が朝日新聞を退社したことを後悔したという。

むのはこう言う。

「戦争中は絶対に書けなかった内容を、新たに一四回分の新聞にしたものでした。この新聞を見て、『あつ、これだ』と思ったんです」。こうした契機を経て、むのは今、こう思う。「戦争中は、真実を新聞は書けなかった、それどころか、戦意昂揚の旗振り役となっていた。その責任を取って私は新聞社を辞めました。そうではなく、辞めずに朝日新聞社に残って、本当の戦争はこうでした、ということを正直に検証する記事を書き続けるべきでした。戦争は絶対に許されない、諸悪の根源だ、とあのときに強く訴えるべきだったんです。それをいま、非常に後悔していますね」

今年二〇一一年は幸徳秋水らが『平民新聞』を舞台に日露戦争に反対し冤罪の大逆事件で捕まり処刑台で首をくくられてからちょうど一〇〇年になる。そこで、筆者はむのに、戦争に反対した平民新聞をどう考えるか、尋ねた。

「これまでの反戦平和運動で、戦争の食い止めるのに成

功したものはない。戦争は悲惨だ、ということ百万回大声でしゃべったって、戦争をやろうとしている連中には、痛くもかゆくもないわけです。戦争をなくすためには、戦争をする必要をなくして、戦争をやれない仕組みをつくらなければだめです。かつて、そこまで踏み込んだ平和運動はなかった」

「戦争をやろうとしている連中」というキーワードが新鮮であった。戦争を止めるには、権力側が戦争計画を立てた段階で、それをえぐり出さなければいけない。現代の戦争では、何万、何十万の兵力を動かすので、少なくとも二、三年の準備期間がある。したがって、ジャーナリズムが戦争をやめさせるには、この準備段階で法や制度と闘いながら、戦争計画をあばくしかない。政府の戦争計画を告発しなければならぬと、むのは指摘する。

わたしたちは、アメリカがブッシュ政権時代、九・一一（二〇〇一年）の後、対テロ戦争の名目で米英がイラクやアフガニスタンに対し単独行動主義で戦争を起こしたことや、ブッシュのポチとあざけられながら日本の小泉政権がイラクに自衛隊を派遣した事実を重く受け止める必要がある。では、イラクで大量殺戮兵器は発見されたのか。なぜそのような間違った判断が行われたのか。その肝心の検証すら、現代の日本のジャーナリズムは他人様まかせで独自に

調べようとはしない。

そんな折り、オーストラリア出身のインタナーネット・ジャーナリスト、ジュリアン・アサンジが運営するサイト「ウィキリークス」が、アメリカ軍によるイラクやアフガニスタンでの戦争の「本当の姿」を暴露し告発する作業を続けている。「ウィキリークス」は二〇一〇年四月、イラク・バクダッドでアメリカ軍の攻撃ヘリコプターが英ロイターのカメラマンや民間人を射撃（二〇〇七年）する生々しい映像を暴露、さらに二〇一〇年一月には米軍の秘密文書二五万点を暴露し、英米など各国政府の反発を招いた。主宰者アサンジは、英紙ガーディアンインタビュで「優れたジャーナリズムは本質的に物議を醸すものだ」と語り、「権力の横暴と闘うことこそ、優れたジャーナリズムの役目。そして権力というものは挑戦されると決まって反発するものだ。つまり物議を醸し出している以上、情報公開はよいことなのだ」と基本的な考えを述べている。

今年九六歳の老記者むのが指し示す反戦平和運動の方法を実践しているのが、若きインタナーネット・ジャーナリストだというのが興味深い。

《アンチ・ナシヨナリズム》

むのがラディカルなところは、「戦争をなくすというこ

とは、結局、国をなくすということになる」と喝破していることだ。「国境というのは、国家が勝手につくったものすぎません。その国家ができてから、戦争が始まったわけです」と続ける。

平和主義とはまさにアンチ・ナシヨナリズムだと、佐高信はむののことは要約している。

しかし世間ではむしろナシヨナリズムが跋扈はつごしている。二〇一〇年、尖閣諸島で中国船籍の漁船が日本の海上保安庁の巡視船と「体当たり」したとか、その映像を海上保安官がインタナーネットの動画サイト「ユーチューブ」に流出させたとか、ついには官房長官や国土交通省大臣に参議院問責決議が可決される事態にまで立ち至った。背景には世界中に蔓延する偏狭なナシヨナリズムがある。また、日本に三六年間植民地支配され、戦後は米ソの冷戦下、南北に分断された朝鮮半島では、二〇一〇年一月、北朝鮮が韓国・延坪島ヨンピョンドを砲撃し民間人を含む四人が死亡した。ここで思い出してほしいのは、日露戦争でポーツマス講和条約を小村寿太郎が結んだとき起きた日比谷焼き討ち事件（一九〇五年九月）だ。それまで勝った、勝ったとばかり戦争やナシヨナリズムをあおった朝日新聞や「万朝報」よろずしやうほうは条約破棄を主張し、桂太郎内閣の御用新聞で条約締結を主張した国民新聞には、日清戦争と違って賠償金を獲得できな

かったことを怒った民衆が押しかけ焼き討ちされた。偏狭なナショナリズムと、売れば何でも書くという商業主義過多のジャーナリズムというしかない。ナショナリズムは近代が生んだ思想だが、その限界も見えてきて久しい。

《「ストン罪」》

この文章のはじめで、毛沢東とレーニンに恋した、むのたけじの自叙伝を紹介したが、その文章はソ連邦や中国への次のような批判で結ばれている。

「振り回した旗には社会主義と書いたが、まっかなにせものだった。現実には富国強兵の国家主義、その典型だった。にせ社会主義が本物の資本主義に負けるのは当然だ。レーニン、毛沢東ともあろうものが、その成り行きに気づかなかつたとは、何とすつとん狂のことよ。よつて両人は『ストン罪』で、そのまま永遠の眠りを続けよ」（原文はカタカナ表記。むの前掲書）

「支配と被支配の仕組み」というキーワードで民衆とともに歩む自らの立ち位置をはつきりさせる一方、前衛党一辺倒のレーニン主義を批判するに当たって、きつい現実を「ストン罪」などと言葉巧みなユーモアで柔らかくくるむ、むのたけじの文章家としてのセンスにほとほと感銘を受けた。

ソ連邦、中国（さらには北朝鮮）は、標榜するような労働者国家ではなくスターリン主義という名前の国家主義だとの指摘（反帝国主義とともに）は、ハンガリー動乱（一九五六年）以来、日本の新左翼の思想的結節点だが、一九五五年生まれで大正デモクラシー以降、治安維持法下の新聞記者、さらにはミニとはいえ新聞経営を実践し、九六年間の同時代を体感したむのたけじから、そうした指摘を直接耳にすると、世の中の仕組みが判つたような、すべてが腑に落ちた気分となった。

「希望は絶望のどん底に実在している」。新聞発行で自殺志願まで追い込まれた経験をもつ、九六歳むのたけじの座右の銘だ。どんなに絶望したことだろうか。そして、その絶望のどん底から希望を見いだしたのであろう。胃がんと肺がんを克服、片目は白内障でほとんど視力がない状態。

むのたけじへのインタビュの後、むのをジャーナリストではなく、むしろラディカルな思想家と紹介すべきだと思ひ直した。その思想家を支えたのはこの横手の心豊かな人びとなのだと、城下町をゆつくり歩きながら感じた。

にしむら・ひでき

一九五一年生まれ。ジャーナリスト。著書に「北朝鮮抑留」第十八富士山丸事件の真相（岩波現代文庫）、「大阪で闘った朝鮮戦争」吹田・枚方事件の青春群像（岩波書店）